アラウンド・サーティーン

鶴川梧郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アラウンド・サーティーン

【Ｎコード】
Ｎ９２５２Ｗ

【作者名】
鶴川梧郎

【あらすじ】
二三香と未波の協力を得て、天敵・半藤を無事に撃退した準とルイ。
が、ほっと一息ついたのも束の間、準は高熱で倒れてしまう。
そして同じ頃、担任の塩崎が体調不良を訴え欠勤、初島も職員室で謎の貧血を起こし倒れていた。二人の能力発動を疑う準は、
さっそく未波・二三香と共に調査に乗り出す。
東京の端っこを舞台とした異能力コメディ第二弾、ひっそりとスタート。

#1

（不公平だ――――――――――！！）

声にできない叫びが準の脳内を埋め尽くした。『声にならない』のではない。とある事情により『声にできない』のだ。

とある事情とは？　大きく二つに分けられる。

その一、声を出すと喉が痛む。さらに、自分の声による音波振動で、頭も巻き添えを食って激しく痛む。

その二、ここは曲がりなりにも集合住宅である。不必要な大声、これ即ち近所迷惑。

この二つを『事情』などと他人事のようなスタンスではなく、準を苛む事象として解釈すれば『高熱と激しい頭痛を伴う風邪』という表現に置き換えられる。――とにかく、頭が割れるように痛い。

桜は粗方散りかけ、四月も中旬に差し掛かろうかという時期に、まさかの風邪。何ともやりきれない話だが、心当たりがないわけではない。

話は三日前、金曜日の夜に遡る。外見年齢十三歳の少女に扮した廃神社の守り神・ルイを執拗に狙う半藤を病院送り（手を下したのは主にルイと二三香だが）にした直後のことだ。

「ちょうど未波もいることだし、私が半藤を飛ばすつもりだった場所に行ってみない？」

夕食がまだなので帰りたいと言う準とルイに、二三香はそう提案した。準としては、いったいどこに連れ回されるのかという不安があるので、今ひとつ乗り気になれない。しかし「安くておいしい店もたくさんあるんだから！」と二三香の但し書きが付くやいなや、ルイが話に乗ってしまった。

かくして意見は三対一となり、準も「財布にやさしい食事ができるならいいか」と渋々了承したのだが……。

結論から言うと、二三香の提案で入った店は味も量も価格も申し

分なかった。カニや大トロや霜降りサイコロステーキが食べ放題で九八〇円など、破格も破格、滅多にあるものではない。そういった意味では、財布だけでなく胃袋にもやさしいチョイスだったと言える。

が、体に対しては別だったと言わざるを得ない。何が体にやさしくなかったのかと言うと……主に現地の気候風土だ。

二三香に連れられて瞬間移動した準の目に飛び込んできたのは、中世ヨーロッパの王侯貴族のような服を着て優雅にウイスキーを傾ける中年の男をデザインした看板だった。大通りの交差点に面するビルの壁面の、実に半分近くを占有しているので、この上なく目立つ。

（それにしてもこの看板、どこかで見覚えがあるような……）

そこはかとない既視感を覚えつつ、屋上に鎮座する一際大きな看板へと視線を移し――準は絶句した。

「二三香、ひとつ聞きたいんだけど」

「何かしら？」

「あの看板に表示されてる数字、あれって気温だよな？　ここの」

「そうよ」

「――たったの4℃ってどういうことだ？」

天気予報風に言えば三月上旬並みの気温だ。具体的な数字を目にしたことで体が周囲の肌寒さを感知し、途端にガタガタと震え始める。

「まー、この時期じゃこんなもんよね。曲がりなりにも北海道だし」

「ほ、北海道！？」

「嘘だと思うなら、携帯のＧＰＳで確認してみるといいわ」

二三香の言葉に従い、準はごそごそとポケットから携帯を取り出す。位置情報検索のアプリを立ち上げ、現在地を表示させると――

「札幌市中央区南四条……だと？」

「そういうこと。ちょうどこのあたりは世のおじさま方の聖地として名高い？すすきの？の一角ね」

「聖地、ねぇ……」
一見したところ、飲み屋やキャバクラがひしめく、ただの繁華街のような気がするが。
「これまた派手に移動したねー。いやー、たまげたたまげた」
呆気にとられて周囲を見回していた未波が初めて口を開いた。
「二三香さんの能力をもってすれば当然です。彼女の今後の経験次第では、太陽の黒点を間近で見たり、新春恒例の箱根駅伝を土星の輪っかの上で開催するのも夢ではありませんよ！」
「いくら優秀な宇宙飛行士でも、水星の公転軌道より内側に入ったら死んじゃうよー？」
ルイの謎解説に、未波から至極真っ当なツッコミが入る。準も顎に手を当てながら、
「土星の輪っかの上で箱根駅伝ってのも、なかなかシュールな光景だな。もっとも、あれを一周するとなると、正月の三が日をフルに使い切っても間に合わないだろうけど」
「渡瀬君。それ、土星に行った時点で箱根駅伝じゃなくなってるから」
――と盛大に話を脱線させながら、冷たい外気に晒され立ち尽くすこと数分。さらに十五分近く街中を歩き回って店に着く頃には、体の芯まですっかり冷えきっていた。
食事を終えて店を出た後も、他愛のない話題に花を咲かせながら札幌の街を練り歩き、二三香の瞬間移動で赤津に戻ったのは十時半過ぎ。
それからのことは、準自身もはっきりとは覚えていない。おそらく疲れが限界に達していたのだろう。シャワーを浴びて着替えるなり、ベッドに滑り込んで泥のように惰眠を貪った。

#1（後書き）

第二弾、ついに始まりました。
相変わらず巻き込まれ役な準、相変わらず変態な守り神・ルイ、
相変わらずクールな二三香、相変わらずセクハラ女王な未波、
相変わらずゴーイング・マイ・ウェイな塩崎先生、
相変わらず一歩引き気味な初島先生、相変わらず物静かなアサミ、
相変わらずキザ野郎な半藤たちのドタバタを引き続きお楽しみください。

#2

日付は変わって土曜日。
準は特に寝坊することもなく、約束の五分前には、ルイを連れて赤津駅前に到着していた。前日の一連のドタバタ、それに伴って積もりに積もった疲労感が嘘のように。
限られた予算でルイに合うものが見つかるかどうか不安ではあったが、未波・二三香コンビのサポートでセール品を無事にゲット。店のロゴ入り紙袋を大事そうに抱え、レジを後にするルイの笑顔に、三人の視線はしばし釘付けになる。
「これだよ、この笑顔だよ～」
「み、未波じないけど、この初々しさは反則だわ」
感嘆とも悶絶とも言えぬ息遣いで胸の内を吐露する未波と二三香。
「一時はどうなるかと思ったけどな。ここまで喜んでもらえると保護者――っと、もとい宿主冥利に尽きるってもんだ」
保護者と言いかけたところで、未波・二三香から「ルイちゃんがあんた一人のものだと思ったら大間違いなんだからね！」とでも言いたげな視線を向けられ、準はあわてて訂正する。
当初この三人の中では、二三香がルイに対して冷静な姿勢を維持する唯一の存在だったのだが……。哀しいかな、今や未波ともども忠実なるルイ信者へと、順調に変貌を遂げつつある。いつの世も、大人は子供に弱いものらしい。
ともあれ、当面の生活に必要な服がひととおり揃ったということは、準にとっての土曜日は八割方終わったに等しい。
「それじゃ一旦赤津に戻りましょうか」
二三香の一言を合図に、それぞれの手を繋いで瞬間移動のための『儀式』を執り行う準・ルイ・未波。
瞬間移動の能力を持つ二三香も含め、四人が一斉にワープするには互いが接触状態になければならない。能力を二三香に付与したル

イ曰く、触れ合うのは服の裾でも鞄でも問題ないらしいのだが、何度か移動を繰り返すうちに『触れるのは手もしくは肩』という不文律が自然と出来上がっていた。至極シンプルに解釈すれば『それっぽさの演出』を狙ってのことなのだろう。

……とはいえ、この一連の動作に、準は未だ緊張と躊躇いを禁じ得なかった。どうしてもワンテンポ遅れが生じ、そのたびに業を煮やした三人に手首ごと鷲掴みされるのもお約束の流れとなりつつある。幼稚園・小学校・中学校と、良くも悪くも男同士でしかつるんで来なかった過去を振り返れば、当然の帰結と言えるのだが――。準の手首にマリリン・モンローも真っ青のくびれができる日も、そう遠くないかも知れない。

「準備はいいかしら？　一応人目に付かないように、学園の駐輪場に飛ぶわね」

「いつでもどうぞ」

準たちを代表して、ルイがＧＯサインを送る。

全員が一斉に目を閉じ、ルイの肩に二三香の手が重なれば準備完了だ。

と、次の瞬間。どことなく間延びしたレゲエ調の店内ＢＧＭが途絶え、激しい雨音と雷鳴が耳朶を打った。

四月上旬ならではの冷気と、服や髪が肌に張り付く感触で直感的に悟る。どうやら、にわか雨に当たってしまったらしい。

反射的に両手で頭をガードした二三香が喚く。

「ちょっと、どうなってんのよぉぉぉ！！」

「二三香、教室！　教室に避難しようよ！」

「未波さん、グッジョブです！　さ、早く中へ」

未波が下したとっさの判断に、いち早くルイが同意した。いずれにせよ、このまま手をこまねいて雨に打たれ続けるのは得策とは言い難い。

ふと、ルイの胸元に抱えられた紙袋が視界に入った。買ったばかりの服が、一度も袖を通すことなく洗濯機行きになる事態はなるべ

く避けたい。準も雷鳴が途切れた隙をついて呼びかける。
「二三香！」
「……了解」
二三香の返事とシンクロするかのように、青い白い閃光が走る。
次の瞬間、ミキサーでフィルター処理を施したかのように、土砂降りの雨音が低く靄のかかった水音に変化した。

ここまでの映像を脳内でフルハイビジョン再生し、準はひとつの結論にたどり着く。
未波と二三香には申し訳ないが、今日は大事を取って休ませてもらおう。
高熱で蒸発寸前の頭をなるべく揺らさぬよう、そっと体を起こして携帯を手に取る。仰向けのまま話せば楽なのだが、それでは今ひとつ病人らしさが伝わらない。電話越しとはいえ、やはり演出は大事だ。
四回目の呼び出し音の後、
「はい、赤津学園でございます」
と、中年にさしかかったあたりの女の声が耳朶を打った。とりあえず無駄に声の大きい体育教師に当たらなくてよかったと、準は胸をなで下ろす。
「一年三組の渡瀬ですけど、塩崎先生か初島先生いらっしゃいますか？」
「一年三組の渡瀬君ね。ちょっと待っててくださいね」
中年教師はそう言うと、どうやら近くにいるらしい初島に「初島先生ー、一年三組の渡瀬君からお電話入ってますよー！」と声をかけた。このような場合、すぐに保留にするのがマナーとしては正しいという話を聞いたことがあるが、頭痛に苛まれている今は逆にそれがありがたい。
程なくして「もしもし」と初島の声が聞こえてくる。
「おはようございます、渡瀬です」

「ああ、おはよう。朝からどうした？　ひょっとして風邪か？」
「ビンゴです。土曜の昼過ぎに通り雨に当たっちゃいまして……」
「あー、ありゃすごかったなー。そうそう、風邪と言えば塩崎先生も『今日は休む』って連絡があったよ。何でも、眩暈がひどくて動けないらしい」
「眩暈、ですか……あの、他に何か聞いてませんか？」
湧き上がる嫌な予感――と言うと語弊があるが、妙な胸騒ぎを覚え、準は駄目元で初島にたずねる。
「いや、特に聞いてないな。電話を受けたのは乃木先生だし。ほら、うちのクラスの化学を受け持ってる――」
「そうですか……」
眩暈の他に何かしらの異変を訴えているようであれば、ルイから付与された能力が発動している可能性が高いのだが……。結局、体の不調を訴えている以上の情報は得られず、準は少し落胆する。
「とりあえず渡瀬君は病欠、と。久坂さんと妹尾さんには俺から伝えとくよ。明日は出て来られそうかな？」
「そうですね。ちょっと微妙なとこですけど……全力で治します！」
精一杯の虚勢を張ってはみたものの、準の心はマジで壊れる五秒前だった。割れんばかりに痛む後頭部、いくら水分を摂っても潤う気配のない喉。ポジティブに構えていられる要素など何ひとつない。
「まあ無理しない程度にな。それじゃ、お大事に」
「すみません、失礼しま――」
そう言いかけた瞬間だった。
受話器を机に落としたような衝撃音と共に、
「初島先生、しっかりしてください！」
「誰か救急車――いや、保健室から担架を！」
という慌しいざわめきが、準の鼓膜と三半規管を大きく揺さぶった。反射的に携帯を遠ざけたはずみで、通話終了ボタンを押してしまう。
（何だったんだ、今の……？）

周りの教師が初島にかけた言葉から推測する限り、初島は目に見える形で発病ないし負傷、あるいは卒倒したと考えるのが妥当な線だろう。しかし『救急車』が一拍の間を置いて『保健室の担架』と言い直されているのがどうも気になる。症状そのものは、よく見ればさほど重篤ではなかった、ということなのだろうか？

必死に思考を巡らせてはみるものの、最初の衝撃音をまともに聞いてしまったダメージはあまりにも大きく、準の意識は再び暗い闇の彼方へと沈んでいった。

（助けてくれ、ルイ……）

#3

「それでは、全会一致につき――渡瀬準を学級副委員長より更迭する」

聞いているだけでも静かに底冷えのするような声が響いた。

感情が嵐のように錯綜する頭の中とは裏腹に、顔ひとつ上げられないまま、体が鉛のように硬直する。ショックと言うより、ほとんど絶望に近い薄笑いが無意識に浮かび、

「冗談、だろ……？」

言葉になっているのかどうか、もはや判断もできない。操り人形さながらに頬が痙攣しているのが分かる。

準をここまで追い詰めているのは、今投げかけられた言葉だけではない。むしろ、その言葉を発した人物の方に大きな比重が置かれていた。

教室よりも都心のオフィス街の方が馴染みそうなライトグレーのスーツ、際立った存在感や威圧感こそないが人目を引く長身、つかみどころなく波打った黒髪。一年三組の副担任・初島史郎が、黒板を背に氷の彫像のごとく立ち尽くしていた。担任の塩崎奈津も固い表情のまま、無言で傍らに控えている。

「久坂さん、妹尾さん、何か異論は？」

初島と何やらアイコンタクトを交わした塩崎が口を開く。

数秒の沈黙の後、椅子を引く音と共に二三香が立ち上がった。

「代表して私たちの見解を発表します。単刀直入に言うと、渡瀬君はクラス委員の器ではありませんでした。自分の意見を述べるどころか、議題に沿った司会進行や問題提起すら人前でできないようではクラス委員として致命的です。今は『クラス委員とその他大勢』に分けることで何とかなりますが、果たしてそれが社会に出てからも通用するでしょうか？　私たちは、この決議に全面的に賛成します」

その瞬間、教室中が割れんばかりの拍手に包まれた。そこかしこで喝采が湧き起こり、
「これでうちのクラスも安泰だな」
「ええ。組織存続のためには、一般のメンバーより無駄な役員・管理職を切るのがセオリーだって初島先生も言ってたしね」
「俺たちも一応ひとつの組織だもんな」
「たかが学校内の一クラスと言えど例外じゃないってことよ」
「つーか、あいつは転校生だからって甘ったれすぎなんだよ！」
といった声まで漏れ聞こえてくる。
『四面楚歌』の四字熟語が、ふと脳裏をよぎった。
味方だったはずの陣営が敵方に回っただけでも精神的ショックは計り知れないのに、中立ですらなかった無関係層からも矛先を向けられては、もはや卒倒レベルだ。
一人一人の声が、徐々に聞き分けられなくなってくる。自己防衛機能による聴覚の麻痺か、はたまた数日前にも味わった貧血もどきの前兆か。しかし、不思議と不快感や不安は感じなかった。
いっそこのまま？落ちて？しまおうか。そう思えるくらいに、安心感すら覚えるほどの浮遊感が体を包み込む。先日の貧血もどきの際にも浮遊感はあったが、感触としてはまったくの別物だ。強いて言うなら、今までは自由落下あるいは無限下降系の目眩だったのに対し、今回のそれは天空に向かって果てしなく上昇していくような、何とも晴れやかな気分だった。
――が、安息への旅路は、突然の激しい揺れによって無惨に寸断された。一瞬、地震かと思った準だが、すぐに誰かに見えない手で肩を掴まれ揺すられているような感覚に気づく。その証拠として、肩だけが人肌と摩擦熱でやたらと温かい上に、誰一人「地震だ！」と騒ぎ立てる者がいない。しかも、揺すられるたびに教室内のざわめきが遠ざかり、視界も少しずつ暗転していく。
やがて入れ替わるようにして、聞き覚えのある――しかし教室内には姿が見えなかった人物の声が耳朶を打ち始めた。その声は加速

度的に大きくなり、はっきりとした輪郭を伴って伝わってくる。
何かに駆り立てられるように、準の名前を必死に呼び続けているのは――
（……ルイ……？）
いつの間に閉じてしまったのか、反射的に瞼が開かれ、準は「う」と小さく呻いた。
「大丈夫ですか？　派手にうなされてたようですが……」
無圧縮・無調整のステレオ音声を耳元で再生されたかのような鮮明さを伴い、ルイの声が耳に滑り込んできた。
「……ああ、何とか」
自ら声を発することで体にかかる負担を確認するように、準は短く答える。
つい先ほどまで目の前で繰り広げられていた委員更迭劇は、どうやら夢だったようだ。
懸念していた頭痛がすっかり治まった代わりに、声を出すのも一苦労なほど喉が乾いていた。枕元に置きっぱなしで、すっかりぬるくなってしまったペットボトルのミネラルウォーターを左手で引っ掴み、キャップを開けるべく布団から右手を出す。
「あ。今湯呑みに移しますから、少々お待ちを……」
ルイは半ば強引にボトルを奪い取るなり、ぺたぺたとコミカルな足音を立ててキッチンへ消えたかと思うと、程なくして湯呑みを片手に戻ってきた。
薄いピンクのパーカーにデニム生地の短パンという服装を除けば、その挙動は座敷わらしそのものと言って差し支えあるまい。
ゆっくりと体を起こし、差し出された湯呑みを一気にあおる。完全に室温に馴染んでしまっていたが、喉と頭を同時に覚醒させるには十分な効果をもたらしてくれた。部屋の中が闇に沈まない程度に薄暗いのもありがたい。

#4

「今何時？」
「えっと……五時半を少し過ぎたところです」
「やれやれ、半日寝ちまったか……晩飯どうしようかな」
「まだ無理しない方がいいですよ。それに、五時半と言っても今は明け方ですし」
「な、何だって――！？」
準はルイの言葉が信じられないとばかりに、開いたまま枕の下敷きになりかけていた携帯を手に取った。
たしかに欠席する旨を初島に伝えた時の頭痛は嘘のように治まり、体を起こせるまでに回復している。が、だからと言って丸一日眠り続けたことなど過去の記憶を総ざらいする限りでは、ただの一度もない。ルイの得意な冗談だと考えるのが妥当な線だ。
『ＰＷＲ』と略語表記された電源ボタンを押し、ディスプレイを復帰させる。
眠っている間に受信していたメール二件（後で確認したら未波と二三香からだった）をひとまず無視して画面右上に視線を移し――

０４月１２日（火）　０５時３４分

――石化した。
準の携帯の時計は二十四時間表示だ。推測どおり夕方であれば『１７時３４分』と表示されているべきで……さらに、完全に変わってしまっている日付が、無言の圧力でもってルイの言葉が真実であることを告げていた。
「この時間じゃ晩飯じゃなくて朝飯の心配しなきゃならないな」
「熱の方はもう大丈夫なんですか？　念のため計っておきましょうよ」

「そうだな……」
ルイに言われるまま、体温計を脇に挟んで再び横になる。
半日に及ぶ頭痛との闘いで、背中が額がじっとりと汗ばんでいた。食事の支度に取りかかる前に、軽くシャワーでも浴びたい気分になる。どうせ、病み上がりのこの身では、いつものようなメニューは到底作れまい。
そんなことを考えているうちに、計測完了を知らせる電子音が鳴り響いた。すかさずルイが体温計を抜き取り、
「三十七度二分ですか……大人しくしていれば大丈夫でしょうけど油断は禁物ですよ？」
「分かってるよ。とりあえず今日の体育は見学する」
第二次反抗期の子供がするように、半ば投げやりに答える。
幸運にも、今日の体育は準の苦手な柔道だった。元運動部員（陸上部）のプライドなどとうに捨ててしまったか、あるいは初めからなかったかのような見学宣言に、安堵の笑みをこぼすルイ。
準の柔道経験は、後にも先にも中学時代の体育の授業だけだ。手本どおり受け身をとっているにも関わらず、背中を打ちつけられるたびに胃がひっくり返りそうになり、もはや相手より吐き気との闘いだった記憶しかない。自分の三半規管を憎んだこともあったが、生まれつき乗り物酔いをするような体質ではないので、結局のところ因果関係は（あくまでも準の中では、だが）謎のままになっている。
「さて……」
病み上がりにかこつけた逃げ口上に心の中で区切りを付け、準はゾウガメのように重々しくベッドから這い出る。足の裏に伝わる、フローリングの床特有のひんやり感が目覚めをさらに加速させ、エンジン起動の瞬間さながらに体が震えた。
「あの、どちらへ？」
ベッドの横にちょこんと体育座りしたルイが顔を上げて尋ねる。
「シャワー浴びてくる。寝汗でベタついて気持ち悪いし、寝癖も直

しとかないと」
　無意識に何度繰り返したか分からない寝返りと地球の重力で、準の前髪は盛大にハネていた。これと言って特徴のない普段の髪型と比較すれば、なかなかに前衛的なヘアスタイルではあるが、やれ高校デビューだのイメチェンだの微熱少年だのと未波に絡まれるのはまっぴら御免だ。
「さようですか。では、お部屋温めておきますね」とルイ。
　ありがたい申し出だったが、言い終えぬうちにルイの口元が怪しく歪んだのを、準は見逃さなかった。
「ルイ」
「……はいっ？」
　一拍の――しかし、聞く者が不信感を抱くには十分な間の後で、大きく上ずった返事が寝室に木霊する。準は深く息を吸うと、静かに切り出した。
「俺と……ひとつにならないか？」
「――――！！」
　ルイの動きがぴたりと止まった。そして、沸騰寸前のやかんのように顔を上気させ、
「ついに……ついに、ご決心いただけたんですね！？」
　第一志望校の合格通知を手にした受験生よろしく、胸の前で小さくガッツポーズまで決めている。
　準もまた、悲願を達成した娘を温かく見守る父親のような眼差しで、
「――何の話だ？」
　その瞬間、ルイの頬が引きつった。やがて、徐々に血の気が引いて青ざめていく。
「えっ？　い、今たしかに『ひとつにならないか？』って……ま、まさか――」
「さすがルイ、理解が早くて助かる。そういうわけだから――戻れ！」

「なんと御無体な！　そんな形でひとつになっても、私は嬉しくな……あッ――！？」
断末魔の叫びを残し、ルイの体は音もなく準の体に吸い込まれていった。
再び一人になった準は、半開きのカーテンを完全に開け放つと、誰にともなく呟く。
「安心しろ。シャワー浴びて着替えたら、また出してやる」

＊　＊　＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9252w/

アラウンド・サーティーン

2011年9月29日03時28分発行